令和５年９月30日（土）　東海北陸ブロック まちづくり委員会
東海北陸ブロック ヘリテージマネージャーネットワーク協議会　日程

１．参加　まちづくり委員会関係者 ヘリテージマネージャーネットワーク協議会関係者
計３４名

２．見学、体験
富山市の廻船業のまち、近代の経済発展を支えた運河・鉄道などを見学して頂きます。

●かつての廻船業のまち
・富山市東岩瀬町のまち並み：江戸時代から明治時代、北前船の重要な寄港地。
（北前船廻船問屋森家：国指定重要文化財、旧馬場家住宅：国登録有形文化財など）
●富山港・工業地帯・市街地・北陸線を結んだ運河と鉄道
・富岩（ふがん）運河を船に乗って見学。
富山市街と岩瀬地区・港を結ぶ、富山市の発展を支えた運河。昭和９年完成
戦前は朝鮮・満洲との物資流通に寄与した。
戦後、水運需要は低下したが再生し、現在は船旅、散策などが出来る。
途中の中島閘門（こうもん；水位調節する場所）は国指定重要文化財。
・環水公園：旧貯木場の再生・・世界一美しいと言われるスタバがある。
・富山地方鉄道富山港線（LRT：Light Rail Transit 路面電車）
（民営の富岩鉄道により大正 13 年開通。日本本土と朝鮮満洲との流通上重要で戦時中、
国に買収され国鉄になる。2006 年まで JR 西が運営したが赤字の為廃止され、
その後を富山市が LRT 施設を設け、民営の富山地方鉄道が鉄道事業を担う。）
・東岩瀬駅舎：とやまの近代歴史遺産百選

●電気ビル（富山電気ビルディング）：国登録有形文化財

北陸電力の前身、日本海電気本社として昭和 11 年に建てられた。
富山の町を曲がり流れていた神通川を治水目的で直線化し(明治 34 年～大正１０年）馳越（はせこし）工事）廃川地を市街地として都市計画。
その廃川地に最初に建てられたビルの一つ。
富山県内の経済人の交流の場としての役割もあった。
市街地をほぼ焼き尽くす富山大空襲（昭和 20 年８月１日）で残った
４棟のうちの１棟（他に県庁、中部高校、大和百貨店）県庁は現存
前面に路面電車が走る電気ビル風景は映画などに使われている。

３．日　程

午前１０時５５分　富山市環水公園・富岩（ふがん）水上ライン乗船場集合
（新幹線利用の方の場合　金沢から　　・かがやき・富山駅着午前１０時３６分
　　東京から　　・かがやき・富山駅着午前１０時２９分
（自動車の方の場合は近隣駐車場をご利用ください）
　　富山駅～環水公園まで徒歩１．２ｋｍ　徒歩約１５分
午前１１時０５分発　富岩（ふがん）水上ライン乗船
午前１２時０５分　富岩運河を通り　水上ライン岩瀬浜到着（東岩瀬町近く）
午前１２時１０分～１２時５０分
　　カナル会館（富岩水上ライン岩瀬浜際）カフェ「さんたふぇ」にて
　　昼食（仕出弁当）・日程等の説明
　　「さんたふぇ」～旧馬場家住宅　徒歩０．７ｋｍ　約１０分
午後１時００分～午後３時００分　東岩瀬のまち、**旧馬場家住宅**
　　にて職藝学院上野幸夫教授の講義・案内、その後徒歩で東岩瀬駅へ向かう
　　旧馬場家住宅～東岩瀬駅　徒歩０．６ｋｍ
午後３時１８分発　**東岩瀬駅発**
　　LRT（路面電車）に乗車
午後３時４９分着　**電気ビル電停**で下車
午後４時００分～５時４５分
　　まちづくり委員会会議　　同ビル４階　寿（ことぶき）
　　ヘリテージマネージャーネットワーク協議会会議　　同ビル４階８号室
午後５時 45 分　　徒歩もしくはLRT で富山駅へ午後６時００分　富山駅着

オプション懇親会
午後６時００分～８時００分頃　同４階　光の間

登録有形文化財

旧馬場家住宅

令和５年９月

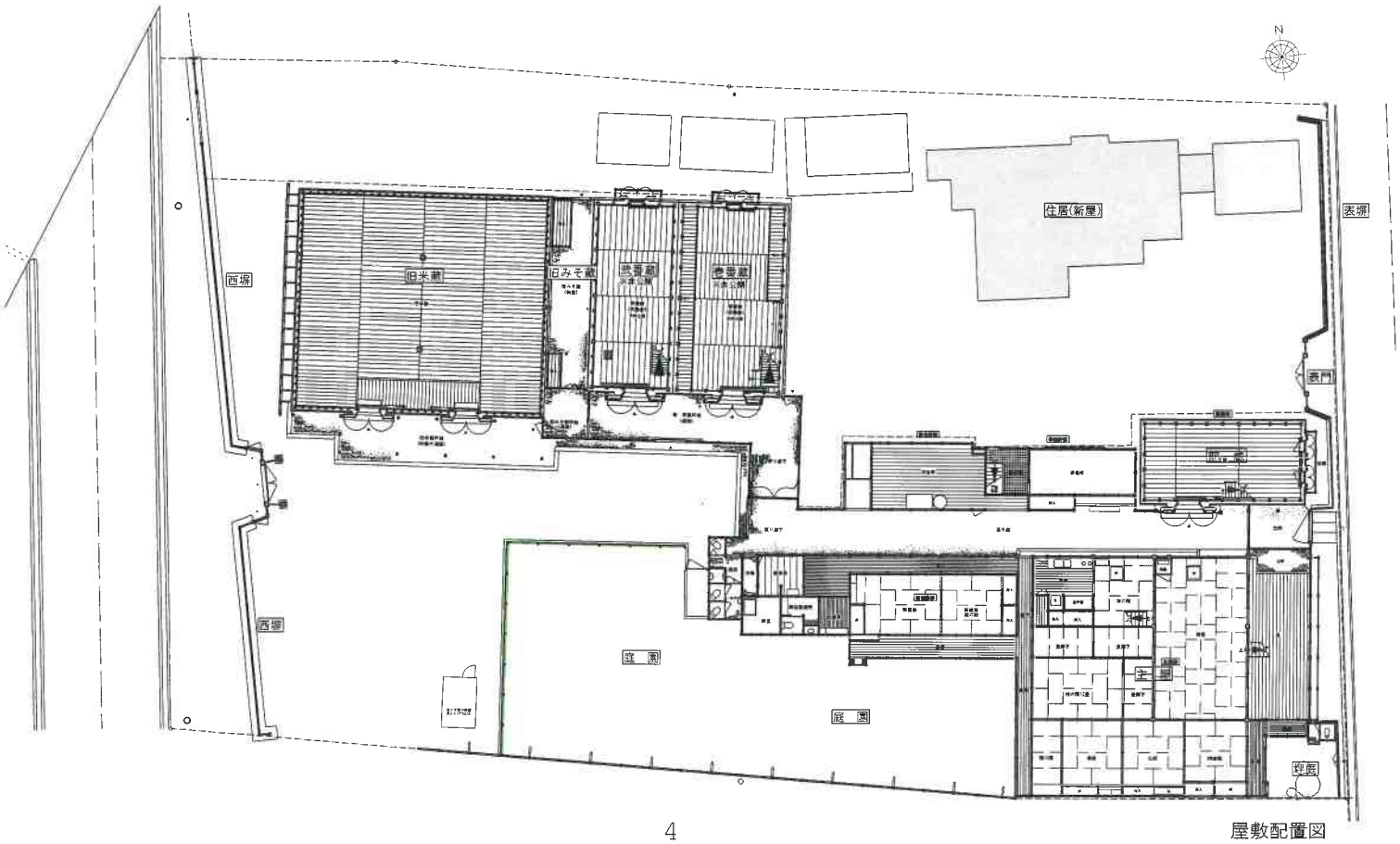
職 藝 学 院

教授　上野 幸夫

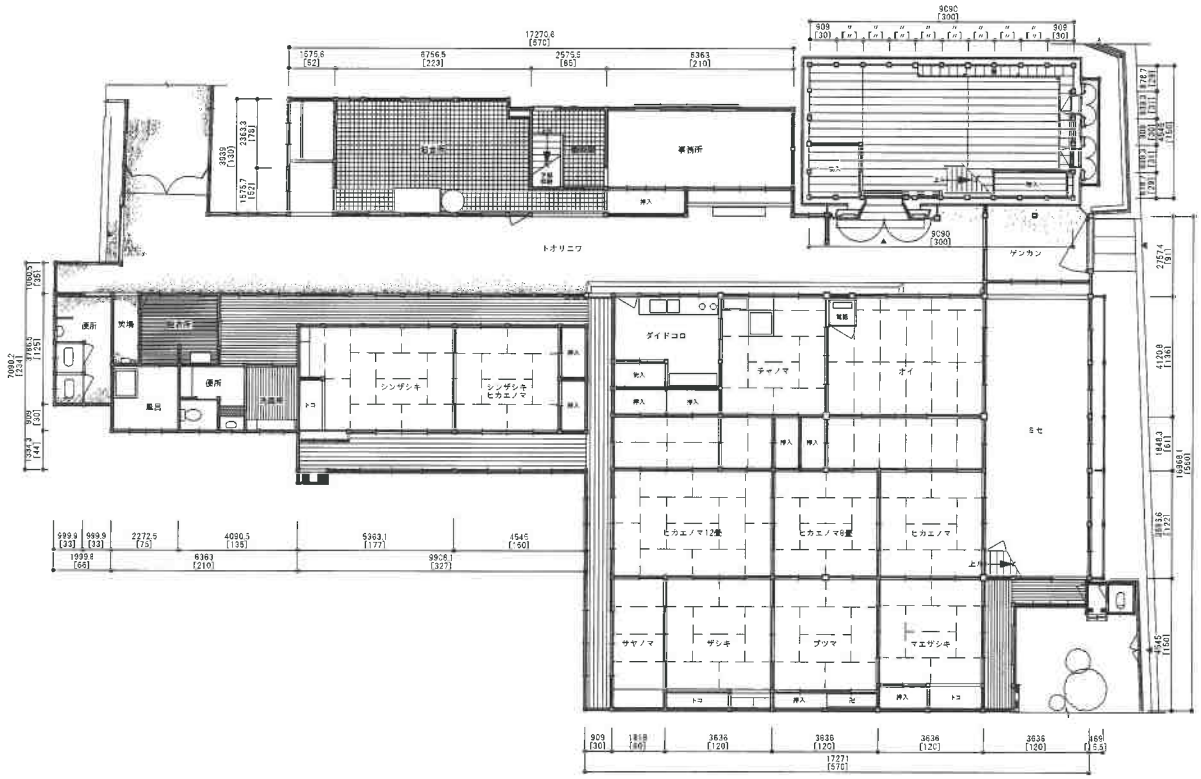
正面全景

①創立沿革
旧馬場家住宅は富山市の北部、神通川の河口右岸の海岸に近い東岩瀬町に所在する。東岩瀬は江戸時代初期より河口港として栄え、加賀藩領の米の保管、移出港として御蔵が数多く置かれ、また、加賀藩主が参勤交代の際に通る北陸道「往還道」の宿駅でもあり、加賀藩における重要な港町として栄えた。
馬場家は北前船貿易で発展した東岩瀬開町時の、江戸時代初期からこの地に住んで活躍しており、市へ寄贈した当主で11代目になる。廻船問屋を語る最後の記録は７代目久兵衛（道久と改名）である。天保４年(1834)に450石積みの船を買い入れ、その後も何艘もの船を加えて銭屋五兵衛とならぶ北陸屈指の大船主となるまでに栄え、近代に入っても蒸気船海運への移行に成功し、拠点も東京に移して第一次世界大戦まで黄金期を築いた。

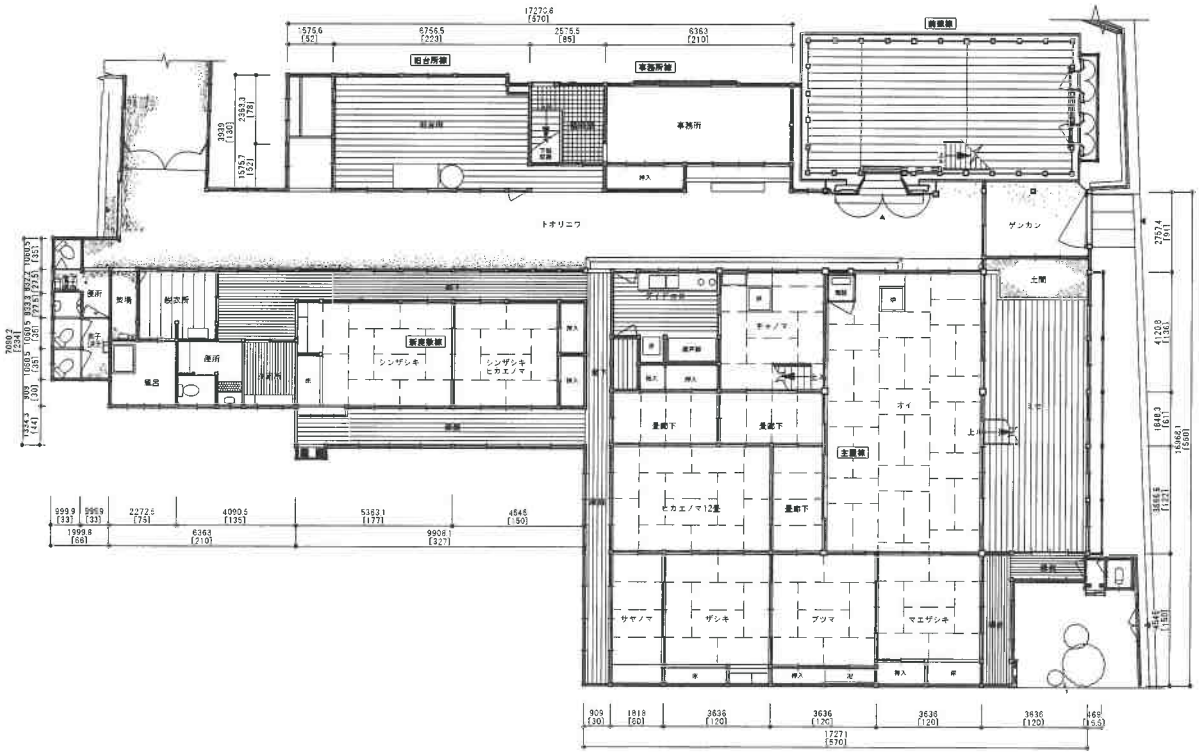
②建立と後世の改変
現在の住宅は、隆盛の基礎を築いた７代目久兵衛が建てたと伝えられ、建築年代を示す史料を欠くが、明治６年の大火の後に以前の部材を用いて大改修したものと考えられる。３棟の土蔵も史料を欠くが、同一の構造や意匠から同時期に建設されたものと考えられ、前蔵だけは大火以前の土蔵か別の所から移築された土蔵で、棟の方向を変えるという小屋組の大改造を行って現在の姿としている。尚、主屋一階の通りニワに付く天窓と、その光を取り入れるための「チャノマ」境のガラス窓化と二階の北側座敷、及び主屋背後に突き出した新座敷は昭和初期に改築や増築されたものである。
旧馬場家住宅は主屋の正面の構えや各室の構成・意匠がよく整い、オイの構造や意匠に見るべきものがある。また、各土蔵も小屋裏を利用した三階建構造である事や、出入口廻り・窓廻り等の意匠に見るべきものがある。米蔵も規模が大きく独特の室内空間を持つ。西塀及び西門も上質の材と意匠になり、背面側の塀として現存する数少ない遺構である。
以上のように富山県の江戸時代以来の廻船問屋型町家建築の構造・意匠を引き継ぎ、県内を代表する優れた意匠の町家として貴重である。
後世の改変としては、外部において主屋・土蔵ともに明治後期頃まで石置き板葺き屋根であったものを、桟瓦葺きに変更している。また、各土蔵の外壁も昭和30年代頃に白漆喰壁や板壁から白色の鉄板張りに変更し、昭和60年頃には窓廻りや妻壁を下見板から波型塩ビ板張りに変更したり、窓を塞いだりしている。
室内においては、北側座敷が増築された昭和初年頃に、主屋の「オイ」廻りから「通りニワ」及び北側二階座敷等の大改造が行われ、昭和60年頃には「ミセ」や「台所」・「事務所」の壁や出入口を、合板やアルミサッシの新建材による内装の改修が行われている。また、平成19年には富山市の岩瀬大町街並み修景等整備事業の補助を受けて正面の狭間格子を
簀虫籠にして玄関口の板戸復原や、小庇屋根や木口銅板包み、屋根唐草瓦や軒角樋等の修復を行っている。
壱番蔵・弐番蔵及び米蔵の室内は大きな改造は見られないが、前蔵の一階のみ後世に西北隅に金庫を設置し、西南隅に一間角の部屋を設ける間仕切りの改変が見られる。



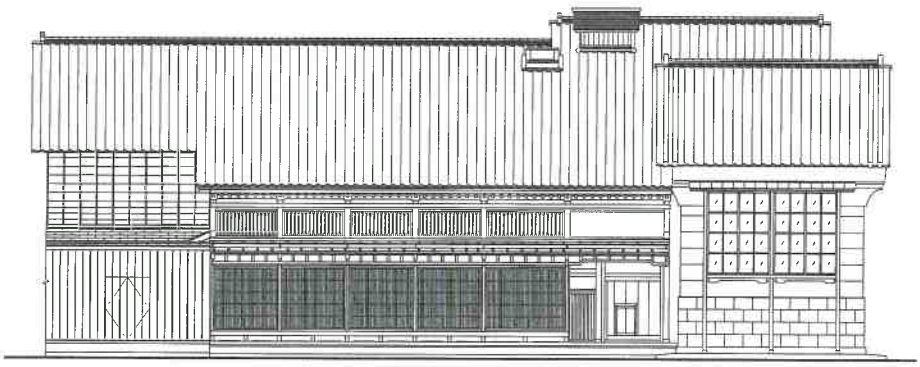
屋敷配置図



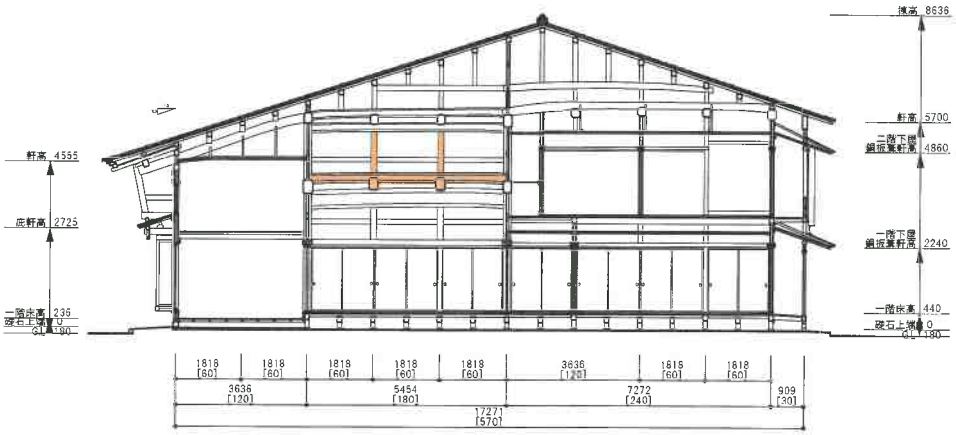
主屋・前蔵　整備前 一階平面図



主屋・前蔵　復原 一階平面図

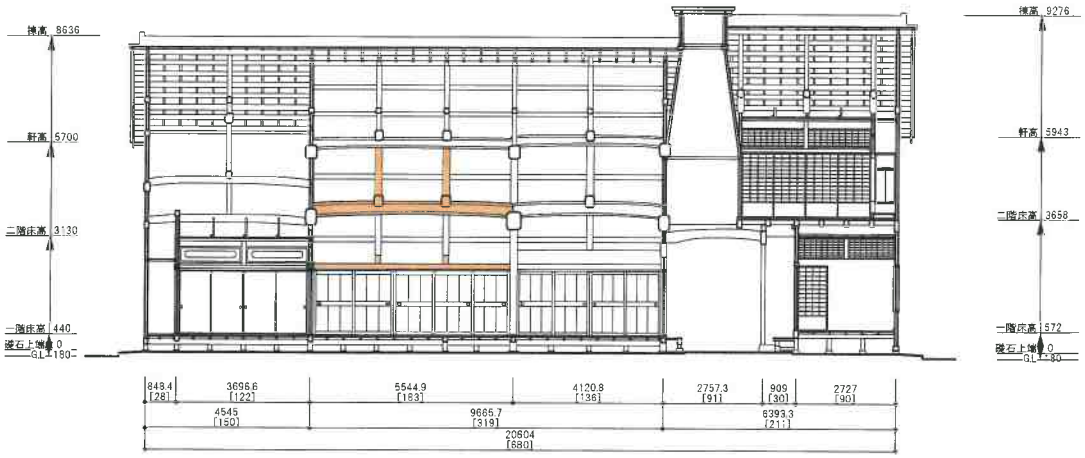


主屋・前蔵　東正面図

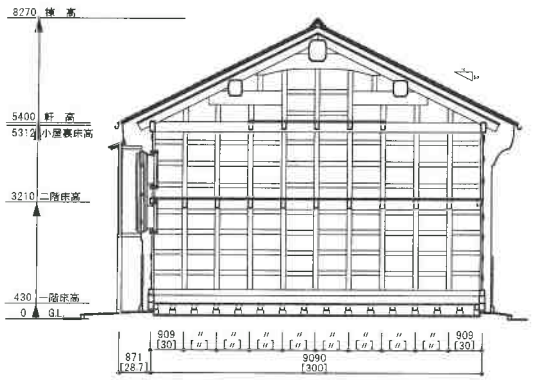


主屋　復原 梁間断面図

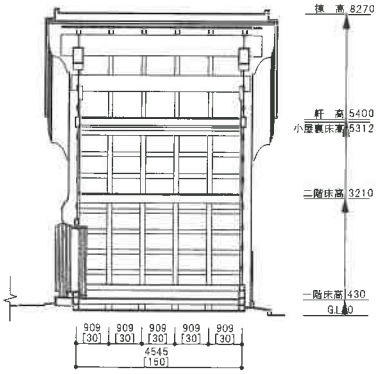
※ 復原 井桁形梁組・吊束・長押等



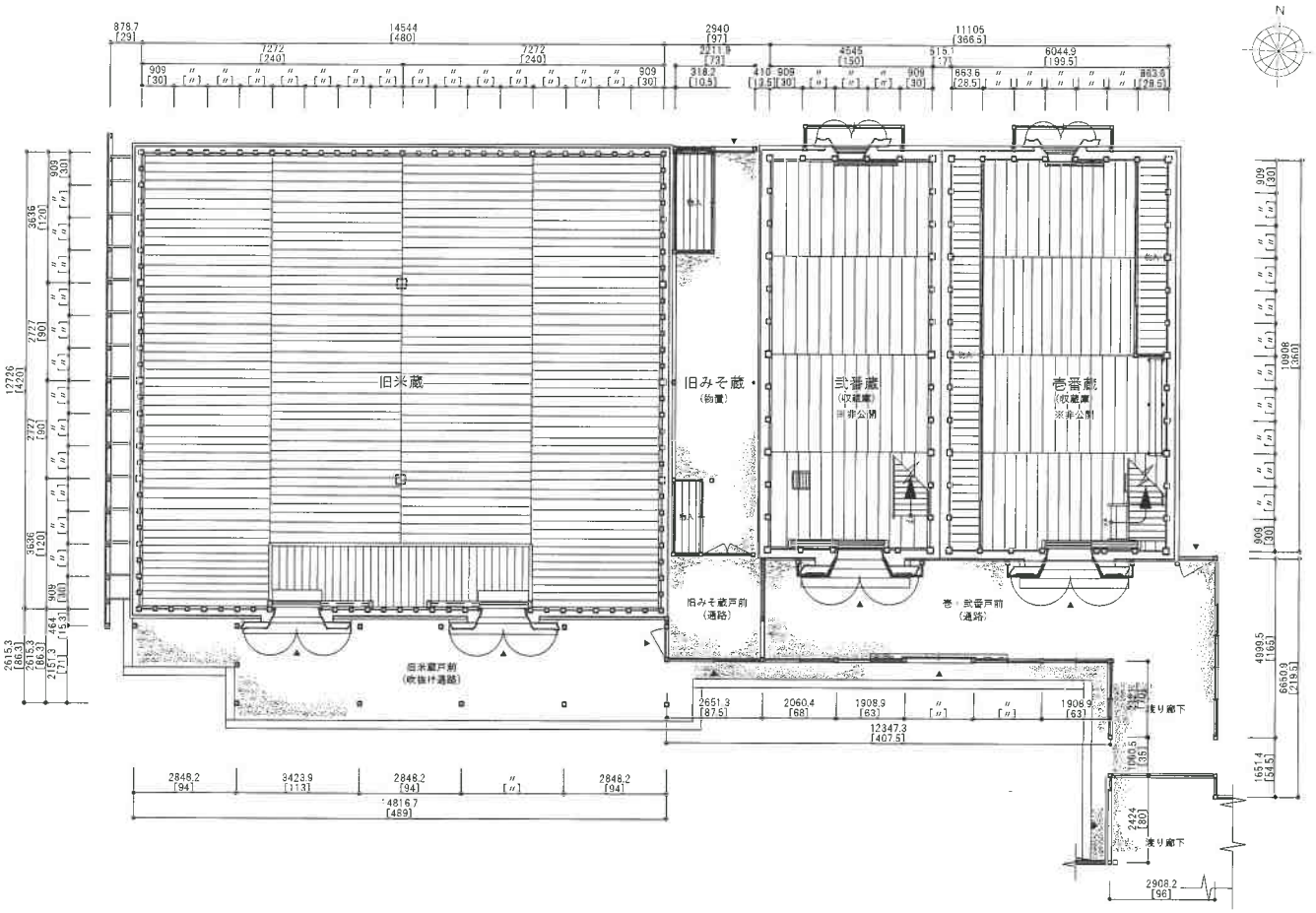
主屋　復原 桁行断面図



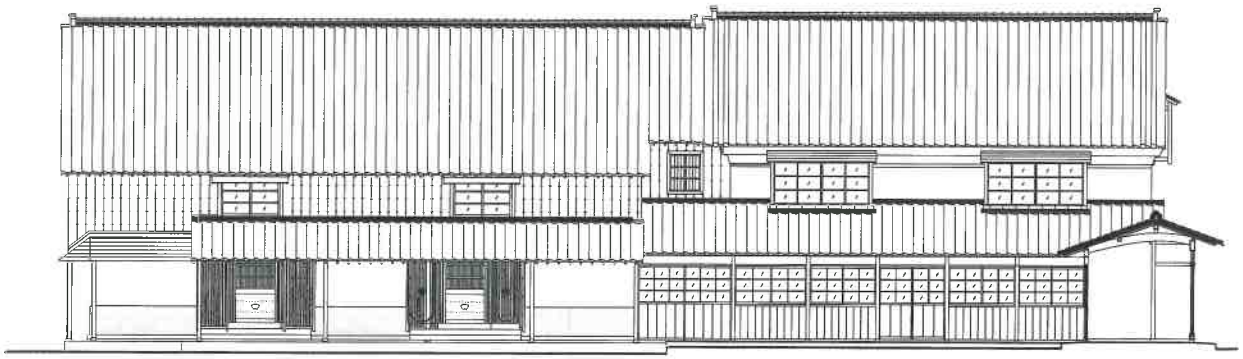
前蔵　梁間断面図



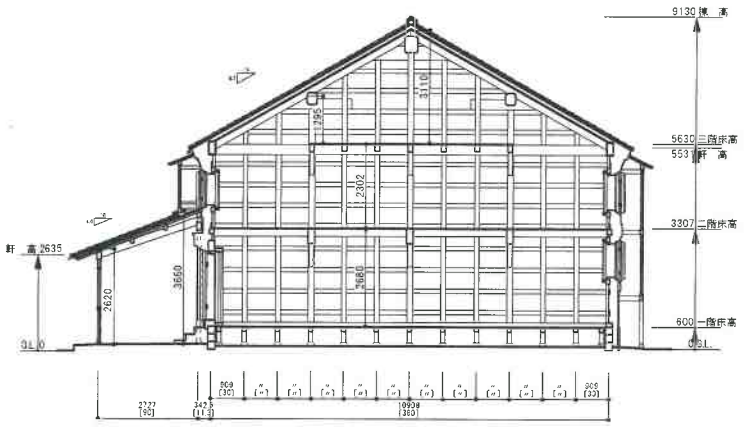
前蔵　桁行断面図



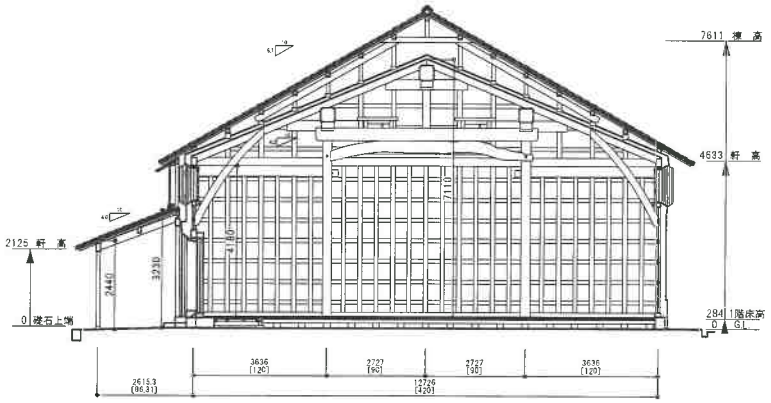
壱番蔵・弐番蔵・米蔵　一階平面図



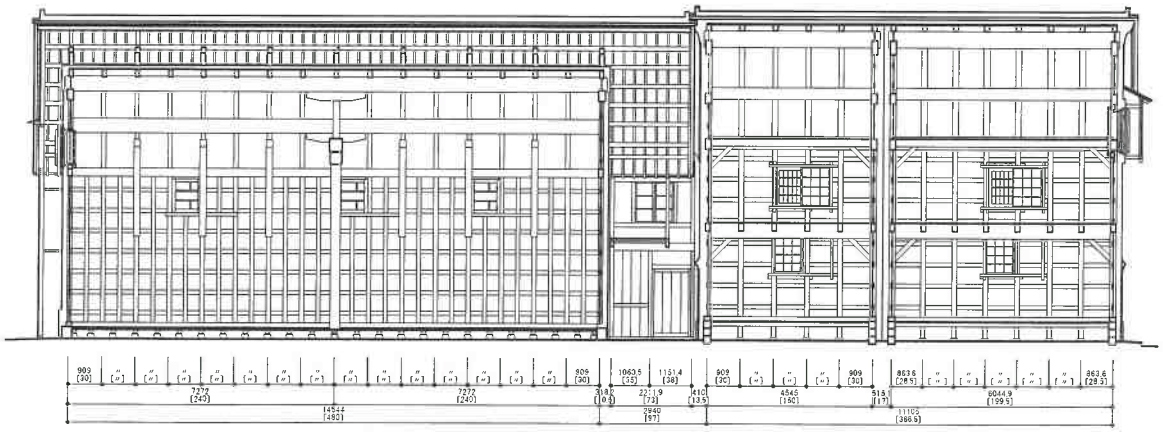
壱番蔵・弐番蔵・米蔵　南正面図



壱番蔵・弐番蔵　梁間断面図



米蔵　梁間断面図



米蔵　桁行断面図　　壱番蔵・弐番蔵　桁行断面図

主　屋

通りニワ見通し

ミセ　吹抜け

チャノマ前　天窓

主　屋

オイ

オイ　梁組み

チャノマ　吹抜け

主　屋

主屋上座敷

新座敷

「北前船で栄えた港町岩瀬の町並みと保存修景」

職　藝　学　院
教授　上野　幸夫

Ⅰ．東岩瀬大町・新川町通りの町並み

1．歴　　史　・寛文２年(1672)に西廻り航路ができ、年貢米の積出港として発展する
　　・幕末に加賀藩が海商育成「岩瀬５大家」畠山、米田、森、馬場、宮城
　　・ 967戸中、明治６年(1873) 650戸、同39年(1906)北部 181戸の大火災

2．都市計画　・ｸﾗﾝｸした道に幅の広い大町大通り、要所に配された細い路地奥の寺院
　　・背後が港に接する通りの西側に立ち並ぶ、特に巨大な廻船問屋の町屋
　　・町全体の防火区画、約50ｍ毎に表通りから裏まで土蔵とした有力町屋

3．屋敷構え　・表の道路に面してミセ兼住居の主屋、あいだに中庭を介して奥に土蔵
　　・町家だが間口が広く、通り側に坪庭を設けてくり抜き門。面取りの塀

4．建築特色　・かつてはほとんどがｽﾑｼｺ（簾虫籠）格子、栗手割り板の石置き屋根
　　・通り土間に豪壮な梁組のデイ、奥は洗練された広い座敷、中庭や坪庭

Ⅱ．外観の魅力　（図１参照）

1．大　戸	2．ｽﾑｼｺ出格子	3．雨落石・基礎石
4．板塀と切抜き門	5．庇・暖簾板	6．二階格子窓・壁・袖壁
7．軒・軒樋	8．屋　根	

Ⅲ．室内の魅力　（図２参照）

1．通り土間	2．オイの梁組	3．ミ　セ
4．茶　室	5．坪　庭	6．ﾐｾ座敷
7．仏　間	8．座　敷	9．土　庇
10．中　庭	11．上便所	12．台所・風呂
13．土　蔵	14．豪華な戸前	

Ⅳ．優れた室内の意匠　（図１下参照）

1．部　材	2．建　具	3．　畳
4．床の間	5．　壁	6．欄　間
7．天　井	8．照　明	9．その他

Ⅵ．おわりに

1．町並み　　・住文化の最高峰の時期にある岩瀬大町通りの町並みは全国でもﾄｯﾌﾟｸﾗｽ
2．たてもん　・港町らしい「けんか山」かつては18ｍの１本の帆柱を芯に、復活を！
3．岩瀬の魅力・港、バイ船（北前船）、巨大な土蔵倉庫、祭り、富岩運河、終着駅
4．理解と啓蒙・地域に住む人達が自分の町の良さを理解し、誇りとしなければ

「古い建物が無いまちは、思い出の無い人生のようなもの！」

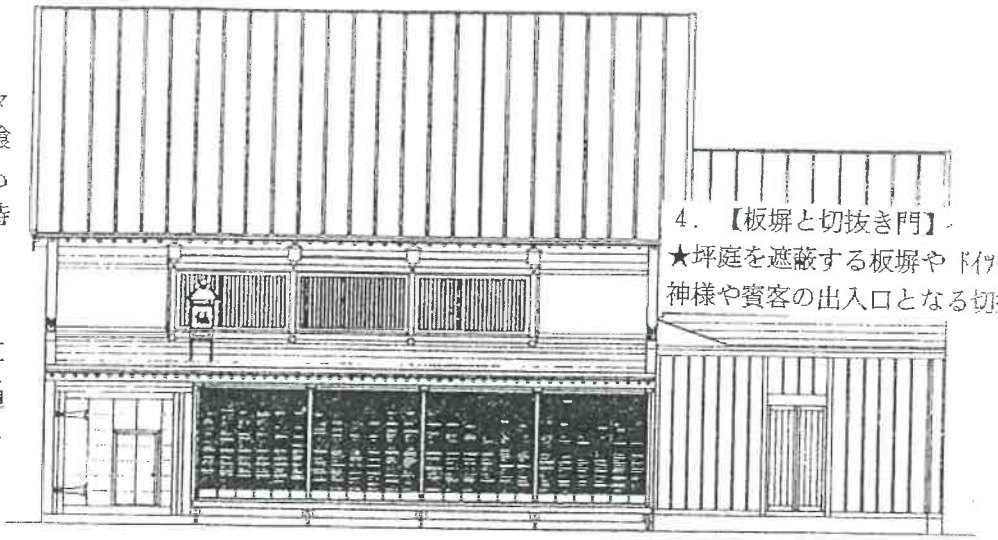
7．【軒・軒樋】
★深い軒を造りだす登り梁に出桁形式の軒、繁垂木に化粧小舞の軒裏
★軒先には建物と調和した銅製角樋、技と意匠を凝らした両端の呼樋

8．【屋　根】※森家は ｶﾗｰ鉄板葺
★北陸らしい雪止め付きの赤瓦、家紋や屋号の付いた軒瓦やけらば瓦

9．【天　窓】※森家は妻側から
★室内中央に位置する部屋には光が入らないため屋根に天窓を空ける

6．【二階格子窓・壁・袖壁】
★二階窓には格子や繊細な細格子、豪華な出格子、中には鉄格子と様々
★柱に貫を入れて真壁とし、白漆喰や ｽﾃｲﾀｽ的な黒漆喰、土蔵造町家も
★軒伝いに火は廻る。類焼防止、時に夜這い防止？町並みらしい袖壁

5．【庇・暖簾板】
★呉東らしい海老虹梁型の腕木、厚板葺やこけら葺の屋根、破風先の渦
★平面的な建築に陰影を付け、時に雨宿りの場、陽・霧除けの暖簾板



4．【板塀と切抜き門】
★坪庭を遮蔽する板塀や ﾄﾞｲﾂ壁の塀
神様や賓客の出入口となる切抜門

1．【大　戸】
★通り土間へ入る夜間の潜戸付きの片開きの大戸、幅広の欅板に鋲打ち

2．【ｽﾑｼｺ出格子】
★取外しできる風情ある簾虫籠子出格子、大戸口脇の妻板には屋号の紋
★意匠を凝らした床下換気口、出格子下に彫刻の持送りや馬つなぎの輪

3．【雨落石・基礎石】
★下屋庇の安らぐ土間と軒下を見切る雨落石、心安らぐ青緑色の金屋石
★柱根や土台下端を湿気から守る御影石や金屋石製の基礎石や狭間石

《優れた室内の意匠》

【部　材】
★柱や敷居、鴨居、長押等檜の四方柾や見付柾、杢の板目等銘木を使用
★各部材の木目を見せた拭き漆塗りを多用、但し檜の柾材や銘木は白木
★表面が鏡のように光る薄削り、一枚刃の鉋による数ミクロンの削り華

【建　具】
★玄関口の大戸は家の顔になるため、幅広の欅を用いて化粧鋲や漆塗り
★通り土間境は堅いイメージの意匠的な帯戸や板戸、舞良戸、格子戸等
★採光重視の外部に面した障子、一分細い竪框、様々なデザインの組子
★採光と換気通風を考えた障子と襖をミックスした建具、夏は簀戸に
★波打ったり気泡が入った手作りガラス、赤青黄の色ガラスやﾀﾞｲﾔｶﾞﾗｽ
★様々なデザインで魚子打ちや七宝焼きなど意匠を凝らした引手金具

【　畳　】
★一般のものより約一分(3㎝)細い上品な細縁の畳縁、難しい技術の紋縁

【床の間】
★床板に欅やベニ松、赤松等の杢や一枚板を使用、本床は最上級の畳床
★黒漆塗りの框、銘木の床柱、檜柾の落し掛、畳床、一枚板天井が定石
★家々によって様々な形式を持つ床の間、大床や琵琶床や踏込み床等

【　壁　】
★朱、青、緑、黄など落ちついた色合いの色壁、岩料を用い退色せず
★柱や天井廻り縁の際など、散りに隙間の無い見事な技、壁下地に銘も

【欄　間】
★「間」の空間が生かされた質の高い繰抜き板欄間と丸彫りの彫刻欄間
★松竹梅・四君子・日本三景・鶴亀・蒲に鷺・桐に鳳凰等、豊富な題材

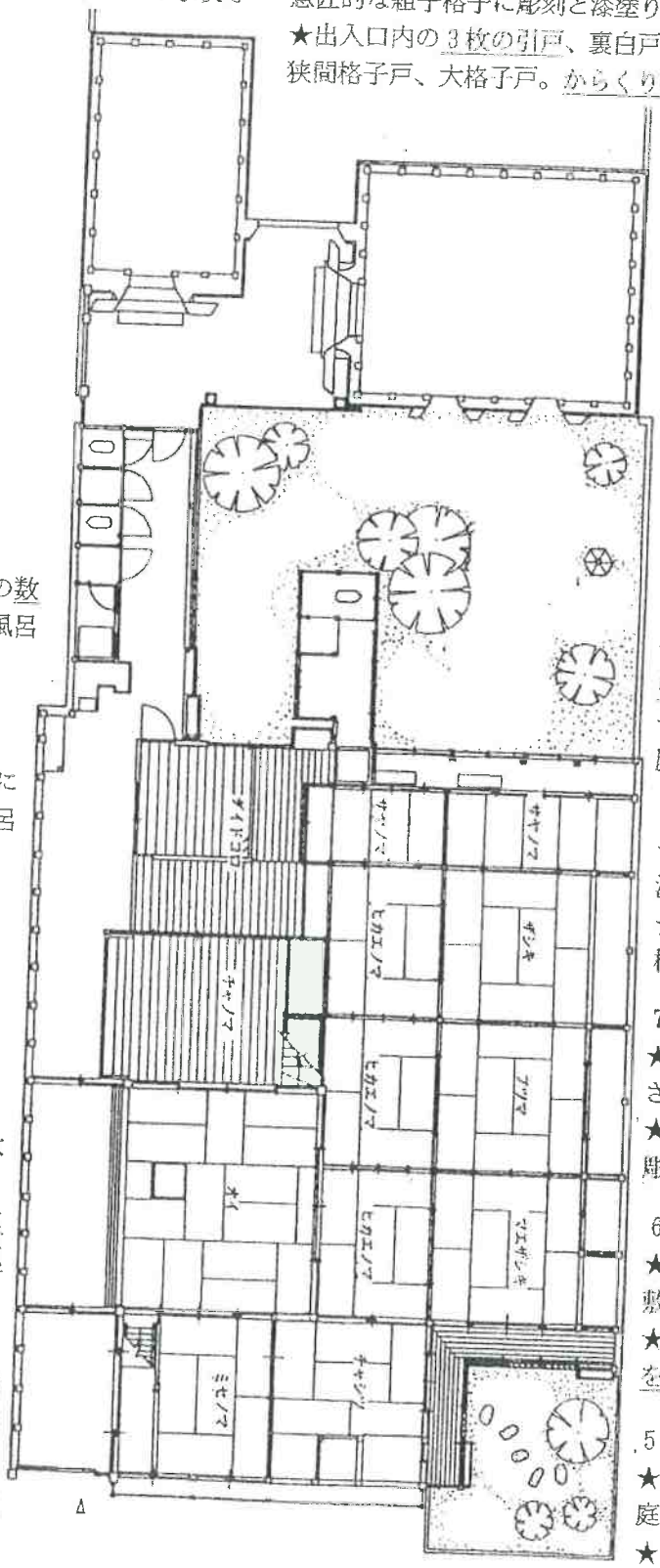
【天　井】
★黒漆塗りや白木の天井廻り縁に棹縁、「床刺しを嫌う」棹縁の配し方
★幅広の檜柾板や屋久杉や薩摩杉の雑杢、虎杢や中杢などの銘木天井板
★本格的書院造りの蟻壁長押、数寄屋風な錆竹や赤松の皮付丸太の棹縁
★鉋が掛けられ漆塗りになる豪壮な枠ノ内造りの梁組みと効果的な採光

【照　明】
★和室に調和したﾃﾞｻｲﾝの照明、薄暗い室内こその一輪の赤い椿や着物
★外から室内は見えず、室内にいては外が見えるサマノコやスムシコ
★時のうつろいが感じられる、自然光の下地窓や天空光を用いた天窓

【神棚・仏壇】
★「神仏混淆」オエの玄関側に神棚、オエ上手の仏間に仏壇、共に見事

13. 【土　蔵】
★富山県は雪国であるため、冬季間の出入りがし易い戸前の文化が発達
★豪華に装飾された出入口廻りの鳥居枠や土扉、白黒漆喰による家紋等

14. 【豪華な戸前】
★「一尺角一人工」の手間を要する最高級の本磨きの黒漆喰壁や白漆喰
★立派な土扉を保護するための鞘、意匠的な組子格子に彫刻と漆塗り
★出入口内の3枚の引戸、裏白戸に狭間格子戸、大格子戸。からくり錠



10. 【中　庭】
★座敷から眺め京都や四国など全国の銘石と多種多様な樹木を配した庭
★中庭に水を打ち、表の日光と温度差をつくり、家の中に涼風をつくる
★庭は単に四季折々の風情を味わうだけでなく、常緑樹は延焼防止に

11. 【上便所】
★座敷から縁へと連続した意匠の数寄屋造りになる賓客用の便所や風呂

9. 【土　庇】
★曖昧模糊とした座敷と庭をつなぐ中間畳、室内でもなく外部でもない
★縁と土間、磨き丸太の縁桁に化粧屋根裏の軽やかな空間、防火戸設備

12. 【台所・風呂】
★主屋への延焼防止のため中庭脇に別棟で造られた火を扱う台所や風呂

8. 【座　敷】
★高級な材を使用し、確かな技で、洗練された意匠になる和の室内空間
★床の間の銘木、落ちついた色壁、様々な意匠の建具、白木や塗の天井

7. 【仏　間】
★冠婚葬祭を考慮して家の中央に配された仏間、建具を外せば大広間に
★真宗王国富山、塗、銘木、金具、彫刻など一級品の仏壇、金無垢柱も

2. 【オイの梁組】
★天井が高く、幅の広い指鴨居や太い梁組で組まれた豪壮な室内空間
★インパクト のある帯戸や板戸の重厚な間仕切りと天空光を取り入れた天窓

6. 【ミセ座敷】
★商談などに用いる床の間付きの座敷で「上座敷」に対する「下座敷」
★坪庭に面し、切抜門から神や賓客を迎える場合には式台の間を兼ねる

1. 【通り土間】
★表の道路から商品出し入れの土蔵まで続く約一間幅の真っ直ぐな土間
★壁面腰の黒漆喰や漆塗り腰板、採光と換気通風を考えた間仕切り建具

5. 【坪　庭】
★表の道路側に面して塀を廻した坪庭、間口が広いからこそできる贅沢
★ミセ座敷と仏間縁側への採光、「ハレ」のための式台としての庭玄関

3. 【ミ　セ】
★道路に面して商いを行う根太天井のミセ、上座には商談用のミセ座敷
★表側は出格子、内側に障子引違い、そして夜間戸締り用の揚げ戸

4. 【茶　室】
★座敷での正式なもてなしの後、席をかえて茶でもてなす数寄屋空間
★室内は茶室の造りで天井低く自然木を用いロや炉を設けて坪庭に面す

《特別寄稿》　　学報2006より

歴史的な建築や景観を活かしたまちづくり

富山市民大学
講師　上野　幸夫

近年、それぞれの地域の気候風土や歴史文化の中で育まれ、カタチづくられた、我が国固有の歴史的な町並みや景観を活かしたまちづくりが、以前から行っていた文化庁はもとより国土交通省や農林水産省も力を入れるようになってきている。古いモノと自然が大好きな小生にとっては大変喜ばしい限りであり、これこそがハード面での「美しい国”日本”」をカタチづくる重要な要素と考える。それは同時に戦後の高度成長と共に画一的になり過ぎた全国共通仕様のまちを脱して、それぞれの地域が個性的で魅力的に光り輝く「地方の時代」を迎えるにふさわしい取り組みと言える。

富山市でも先に「富山市景観まちづくり条例」を制定し、推進地域として「岩瀬大町・新川町通りの町並み修景事業」を進めており、その成果はライトレールとの相乗効果もあって新聞テレビ等で報じられているとおりである。小生も縁あって町並み再生に関わらせて頂き、住民の方々と富山市都市計画課、そして当学院ＯＢ達等と楽しみながら修景しているが、このような事業を遂行するにあたっては、住民・行政・専門家が協力し「三位一体」とならなければホンモノはできないものであると常々感じている。

住民はまず、自分たちの町を愛する心、誇りに思う心が大切であり、その為には自分たちの町の「歴史」や「見どころ」を知る必要がある。それを広く住民に理解してもらう為には啓蒙活動を行い、そして現在だけでなく未来へ継承する為には子供たちへの教育が不可欠である。

行政は修景地域内に於いて景観を損ねるような開発が行われないように、また、適切な修景を行われるように届け出を義務付け、同時に町並みという個人所有の集合体でありながら半公共的な景観を美しくしてそれを維持しようとする住民に対し、経済的、精神的負担が所有者の重荷にならないように支援し、道路や河川、電線や標識といった公的なもは、町並みに調和した意匠に率先して計画的に整備する事に心掛ける事が大切である。

専門家はその町が持っている固有の地理的条件や町の歴史や変遷を調査し、歴史的な建物や景観がどこにどれだけ残っているかを隅から隅まで歩いて見て廻り、そのまちの景観を特徴づけている要素が何なのかを抽出し、環境や建築の細部まで及んだ修景基準を作成し、アドバイスする。

実際の修景に関わる設計者や施工者（職人）はその町の固有の特徴を細部に至るまで理解し、自分のカラーは出さず、そのものが持っている個性を十二分に発揮させる事に心掛け、町並み修景という一定の規制の中で腕を競い合い、未来に伝える重要な仕事である事を肝に銘じて、自分が関わった仕事に対して「こだわり」と「誇り」と「責任」を持つことが大切である。

今年の富山市民大学でも、東岩瀬駅をスタートして町並みを散策し、岩瀬浜駅まで受講生の皆さんと一緒に歩いた。まだ３割程の修景だが皆一同に町並みを堪能して頂き、修景が済むのを心待ちにしている様子であった。

富山市内には岩瀬以外に、海沿いでは四方や水橋。平野部では金泉寺や新庄、速星や大久保。山麓部では上滝や八尾、笹津や坂本、片掛の町並み等があり、雄大な立山連峰を背景にした月岡や西の番及び大久保地域に見られる散居景観も富山市の誇る魅力的な景観と言える。

「古い建物や町並み、そして自然の無いまちは思い出の無い人生のようなもの」歴史的な風格と文化の香り高い町並みには、住む人、旅人、すべての人にうるおいと安らぎを与えてくれる。歴史的な建築や景観を活かしたまちづくりが市内各地で行われ「美しい国」になる事を期待して止まない。国内外を問わず私たちが旅をして感動するのは、その地域固有の歴史や文化、または自然景観に接した時である。

富山市岩瀬大町・新川町通り等の街並み修景等整備事業補助制度

岩瀬大町・新川町通りは長い歴史があり、出格子にスムシコ等のある家屋が今も残り、明治ロマンの雰囲気を醸し出しています。しかし、経年による老朽化、改修などで、岩瀬らしい風情が消えつつあります。このため歴史的な通り沿いの伝統的家屋などを修景し、街並み形成を進めるため、補助制度を設けました。

東岩瀬回船問屋型の家屋

間口が大きく奥行きが長く、家屋の形態は、大戸の出入りとは別に、お客をもてなすための板塀・切抜け門と座敷の間に坪庭があり、回船問屋で繁栄した岩瀬独自の家屋の特徴が表れています。

防火土蔵造り型の家屋

明治39年の岩瀬地区の火災後に建てられた防火に強い家屋で、一階に庇がなく、一間幅の下屋としており、前面に鋳物でつくられた鉄柱を設け、木枠に鉄板を張り付けた横引きの防火戸が設けられています。

伝統的家屋修景事業

◆補助率、補助限度額等◆

建築物外観修景	平成17年度～平成19年度	補助率70% 限度額500万円	平成20年度～平成21年度	補助率70% 限度額250万円
格子等修景		補助率90% 限度額300万円		補助率90% 限度額150万円
外構物修景		補助率70% 限度額300万円		補助率70% 限度額150万円

◆伝統的家屋修景補助基準◆

項目			修景補助基準
建築物外観修景	位置		・外壁の位置・軒線は町屋沿いにできる限り揃える。やむを得ず後退する場合は、伝統的な塀等を設け、町屋の連続性を維持する。 ・外壁の道路からの後退距離は、1階の壁面は2m以下とし、2階の壁面は1階の壁面よりさらに後退する。 ・現在の街並みを形成している歴史的な敷地の形状をできるだけ維持する。
	高さ・階数		・高さは、10m以下とする。 ・地上階数は、原則として2以下とする。
	意匠	屋根	・屋根の形は、原則として切妻平入りとする。 ・屋根材は、原則として赤瓦（濃いあずき色）又は黒瓦とする。
		庇	・1階部分は、道路に沿った庇を設ける。 ・岩瀬独自に発展した起くりのある庇の保全に努める。
		外壁	・外壁は、原則として板張り、土蔵壁、漆喰塗壁などの伝統的素材仕上げとする。 ・外壁の色彩は、伝統的色彩、または白・黒・茶・薄茶など伝統的家屋にふさわしい色彩とする。 ・その他、岩瀬独自の町屋の伝統的意匠をできる限り取り入れる。
		開口部	・出入口は大戸又は格子戸とする。 出入口以外の開口部は、できるだけ木製格子戸、出格子、スムシコなどの修復・復元に努める。
	設備		・屋外の設備機器等は、道路から見える位置には設置しない。やむを得ない場合は、伝統的意匠による目隠し等を設ける。
格子等修景			・大戸・格子戸・出格子、スムシコ等の木製格子等の修復・復元に努める。
外構物修景	門、塀		・できる限り伝統的な形式・意匠とする。
	広告物		・伝統的な意匠を基本とする。 ・位置、大きさは伝統的家屋にふさわしいものに配慮する。
	敷地内の舗装		・道路に面する敷地の舗装は、伝統的素材を使った仕上げに配慮する。
	駐車場		・大町・新川町通り沿いにできるだけ駐車場を設けない。やむを得ず駐車場を設ける場合は、伝統的家屋との一体化を図り、伝統的意匠を配慮する。

一般建築物等修景事業

◆補助率、補助限度額等◆

建築物外観修景	平成17年度～平成19年度	補助率70% 限度額300万円	平成20年度～平成21年度	補助率70% 限度額150万円
格子等修景		補助率90% 限度額100万円		補助率90% 限度額50万円
外構物修景		補助率70% 限度額100万円		補助率70% 限度額50万円

◆伝統的家屋修景補助基準◆

項目			修景補助基準
建築物外観修景	位置		・外壁の位置・軒線は町屋沿いにできる限り揃える。建築物の外壁が道路境界線から後退している場合は、門・塀、又は木製のゲート等を設けるなど町屋の連続性を配慮する。
	高さ・階数		・高さは、原則として10m以下とする。ただし、既存についてはこの限りでない。 ・地上階数は、原則として2以下とする。ただし、既存についてはこの限りでない。
	意匠	屋根	・屋根の形は、伝統的街並みに調和するよう切妻平入りを基本とする。ただし、鉄筋コンクリート造・鉄骨造等は、建物形態等の形態・意匠に工夫をする。 ・切妻屋根の屋根材は、原則として赤瓦（濃いあずき色）又は黒瓦とする。
		庇	・1階部分は、できるだけ伝統的街並みに調和する庇を設ける。
		外壁	・外壁は、伝統的家屋の意匠に準じるよう配慮する。 ・外壁の色彩は、伝統的色彩、または白・黒・茶・薄茶など歴史的街並みに調和した色彩とする。
		開口部	・出入口の戸は、家屋においては原則として引戸とする。事務所などの出入口においては意匠・色彩に配慮する。 ・出入口以外の開口部は、できるだけ格子戸、出格子などを設ける。
	設備		・屋外の設備機器等は、道路から見える位置には設置しない。やむを得ない場合は、伝統的家屋の意匠に準じた目隠し等を設ける。
格子等修景			大戸・格子戸・出格子、スムシコ等の木製格子等の修復・新設などを図る。
外構物修景	門、塀		・できる限り伝統的な形式・意匠に準じたものとする。
	広告物		・伝統的な意匠を基本とする。 ・位置、大きさは伝統的街並みにふさわしいものに配慮する。
	敷地内の舗装		・道路に面する敷地の舗装は、できるだけ伝統的素材を使った仕上げに配慮する。
	駐車場		大町・新川町通り沿いで建築物に付属する駐車場を設けている場合は、木造上屋又は植栽などを工夫し、歴史的街並みとの調和に配慮する。 ・大町・新川町通り沿いの駐車場敷地では、木造上屋の設置又は道路境界線に沿った板塀・木製ゲートを設けるなど歴史的街並みとの調和に配慮する。

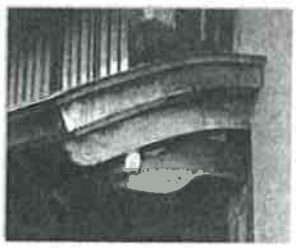
伝統的家屋の様式

岩瀬の伝統的家屋に残る様式を紹介します。まちを歩きながら見つけてみてください。

起(む)くりのある庇(ひさし)

岩瀬地区の「東岩瀬回船問屋型」の家屋の一階庇は、起くり（膨れた曲線）のついたコケラ葺きで、蝦形の曲線をもった腕木で支えられています。

また、庇の両端には、破風板が設けられ、破風の先端には、くり型（曲線を用いた彫刻）が施されています。



板塀(いたべい)と切抜(きりぬ)き門(もん)

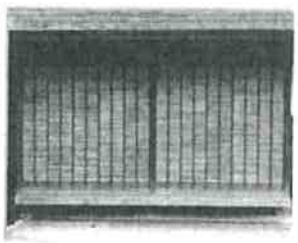
お客用の出入口として板塀の一部を切り抜いて造られた切抜き門から坪庭を通って座敷に上がることができるようにされています。

板塀の上部には、防犯の配慮から鉄製の忍び返しが設けられた家屋もあります。

スムシコ

スムシコは竹でつくった簾を格子のように使い外から内部が見えませんが、中から外が見えるもので、全国的に数少ない格子形状です。

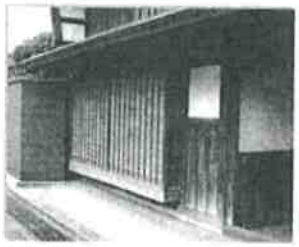
岩瀬地区の森家等の一階の出格子にみられ、岩瀬地区はスムシコのある街並みです。



出格子(でごうし)

出格子には、彫刻を施した持ち送りを付けたものがみられます。

また、岩瀬地区の伝統的家屋の多くは、一階が出格子であり、出格子の側面には、屋号を彫り込んだすかし彫りがあることが特徴です。



大戸(おおど)

岩瀬地区の伝統的家屋の大戸は、開き戸タイプで、夜間の出入り用の潜り戸が付いています。

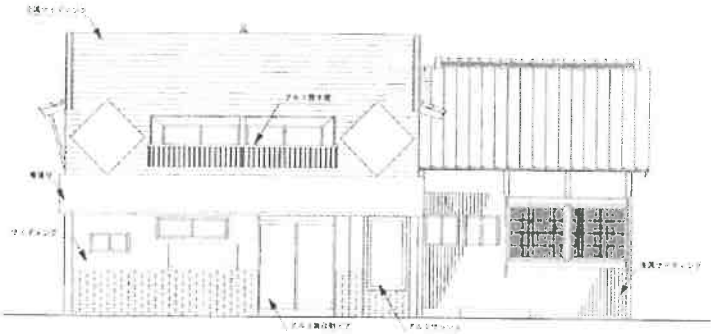
大戸は日中、内部側に開放された状態になっています。

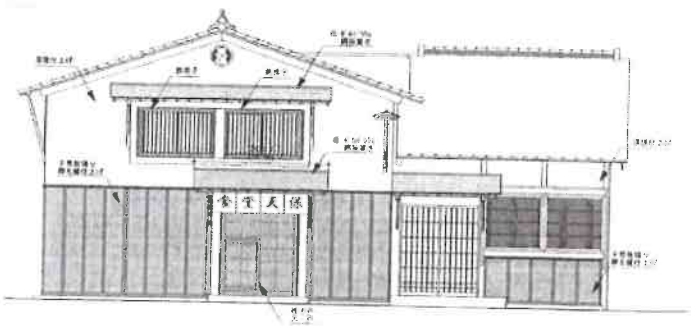
なお、東岩瀬回船問屋型の大戸は桧で巾の広い板材が使われています。

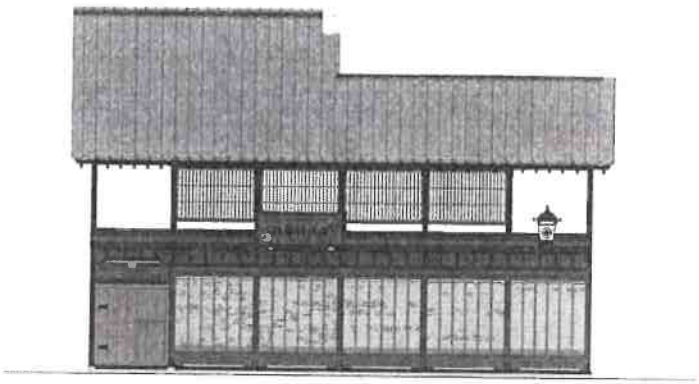
敷地内の舗装

岩瀬大町・新川町通り沿いの道路境界側には、青色の越前石又は金屋石の雨落石が敷設されている特徴があります。

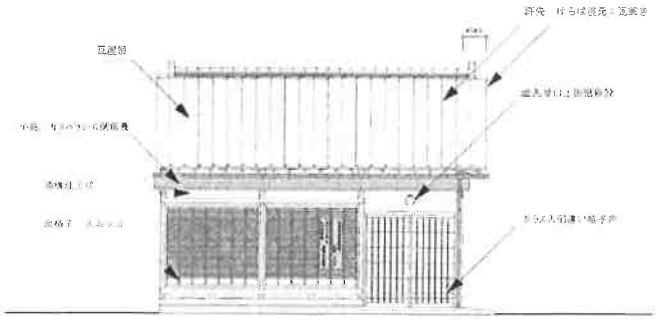
また、道路境界から大戸前までのアプローチ部分には御影石、金屋石の石材が敷設されています。



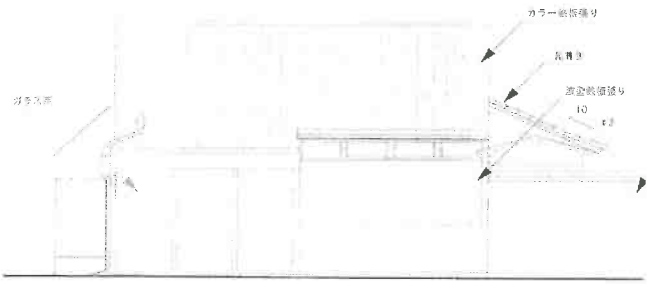




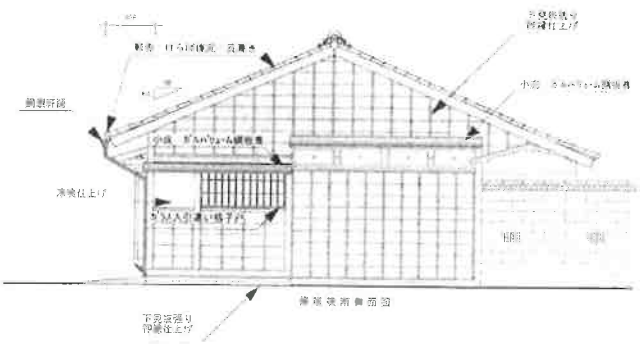
現状正面図



修復後正面図

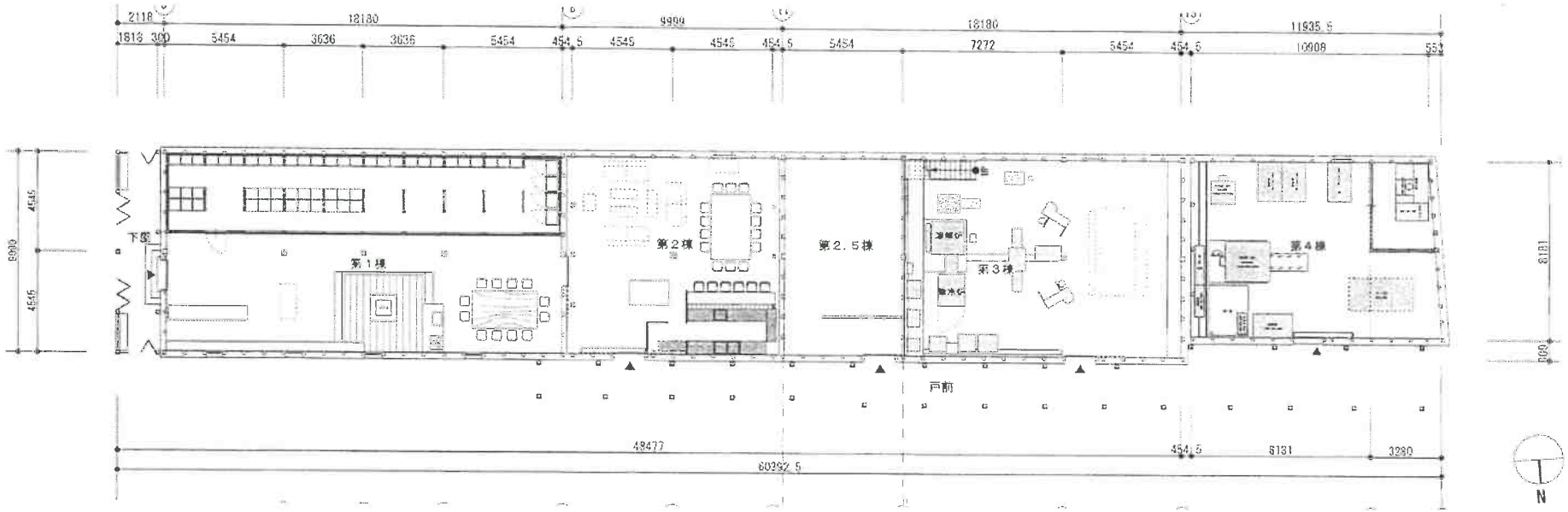


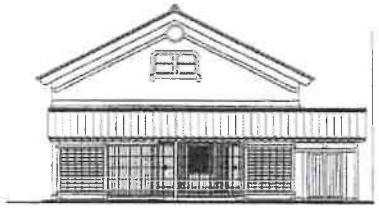
現状側面図



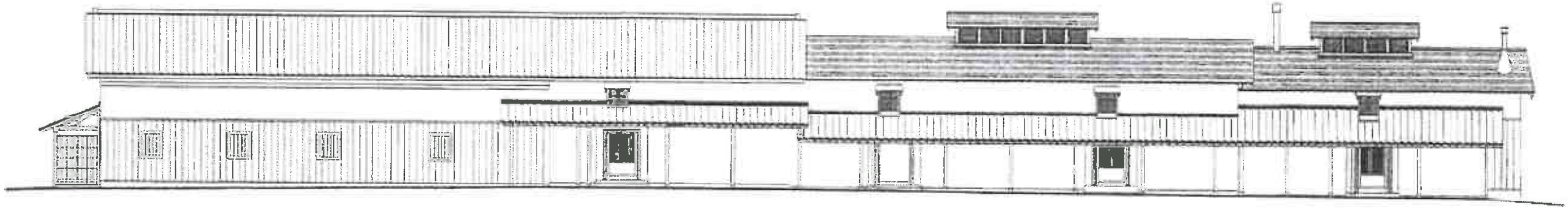
修復後側面図

図面名称	岩瀬の町並み修景事業	所在	富山市
図面種類	現状・整備各種図面	縮尺	
図面調整	聯藝学院　教 授　上野 幸夫	番号	
図面作成	同 上　研究員　牧野 直子	作成日	H21

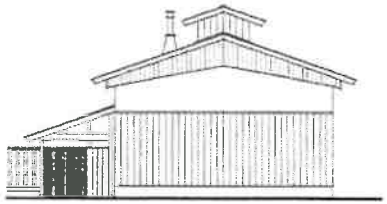




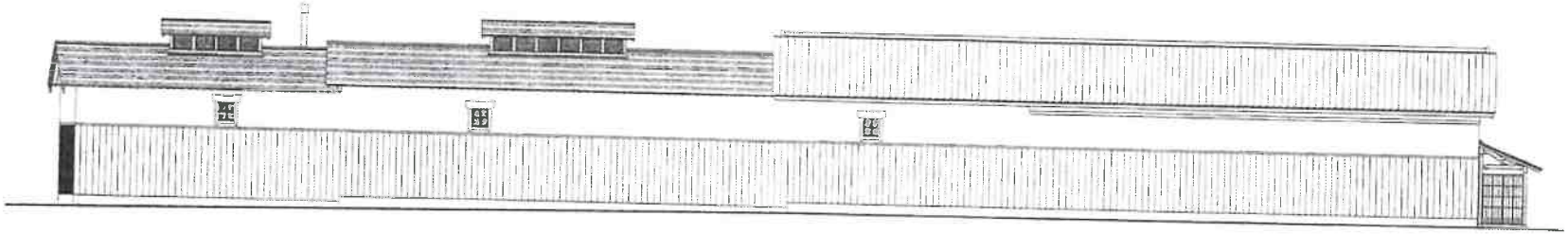
東面図



北面図



西面図



南面図

名　称	旧岩瀬米穀再生工事	所在	富山市
図面種類	平面図 立面図	縮尺	1/200
図面調整	職藝学院　教授　上野　幸夫		
図面作成	高井　章博	作成日時	H21.8.5

富山市
登録有形文化財 富山電気ビルディング本館・新館

令和５年９月

職 藝 学 院
教授　上野 幸夫

北西面全景　左奥が新館で右手が本館

富山電気ビル所見　　職藝学院　教授　上野　幸夫

富山電気ビルは昭和11年(1936)、日本海電気（現北陸電力の前身）の本社ビル兼貸ビル、そして、文化的な音楽会や各種会合の場と県外客宿泊の洋式ホテルを含めた総合ビルとして建設された。建設地は大正13年(1924)に国の指定を受けた富山市の都市計画事業と関わっており、富山市中心部と岩瀬港間に運河を造り、運河地帯は新工業用地化して、運河掘削で出た土砂は明治期に行われた神通川本流の河道変更により生じた廃川地を埋立て都市化し、岩瀬港と都市中心部を運河で結ぶという一挙両得策の地である。

当時、日本海電気社長の山田昌作は富山県の中心地帯発展を期して、先の昭和10年に建設された県庁舎（登録有形文化財）の東に位置するこの地を新社屋建設地とした。敷地は西面が電車通りで北面に幹線道路が通り、東南面に斜めに市道と松川が流れる三角地帯で、南隅の松川には昭和10年に架けられた桜橋（登録有形文化財）が掛かっている。設計は東大建築科を卒業後ニューヨークで７年ほどビル設計を行い帰国した新進気鋭の富永譲吉が携わり、工事は４社の指名入札の結果、総工費60万円で戸田組が落札した。昭和11年に富山市で日満産業博覧会が開催される事もあり、工事は昭和 9年に起工し同11年 2月に竣工し、 4月の開館から行われた博覧会では多くの来客に利用され、感銘をあたえ、その偉容は富山県の発展と勢力を内外に誇示するものであった。

やがて太平洋戦争が勃発し、戦局が進展して来ると３階以上の施設は海軍軍需監理部が接収するところとなり、昭和20年 8月の富山市大空襲では屋上の屋根に焼夷弾が落下して５階を焼失したが、翌年の 9月には復旧工事を完了して県庁と共に焼け残った富山市復興の力強いシンボルとなった。しかし、今度は昭和27年までビルの３階以上が進駐軍が接収するところとなった。

昭和27年には 4.5階各室の改修と外壁の美装工事が行われ、翌28年からはホテル部門も再開され、昭和31年には北陸電力の本社機構と富山支店を一体化して事務効率を図るため、北面道路に接して新館が増築された。設計は本館設計者の富永であり、その意に沿って北西隅を中心に左右対称のＬ字形になる姿とし、外観も本館とほぼ同様の意匠にして全体を一体化している。翌32年には 5階南側にも社交倶楽部の部屋が増築された。

昭和33年には昭和天皇皇后両陛下が御宿泊されるために、４階各室の改装工事や屋上階の東南隅に展望室が設けられ、同36年には皇太子・同妃殿下（平成天皇皇后両陛下）も御宿泊され、その後も昭和38年に東側中２階上に３階部を増築、同49年に４階ホテルの廃止に伴う改装工事と南面のサッシ化、同53年に西面、54年に東面のサッシ化など、数多くの増改築が行われ貸事務所兼貸し室・宴会場等として現在に至っている。

ビル建設当初は地上５階地下１階、延面積 3,369坪で、地階から３階までを全て貸事務所として、４階は食堂とホテル、そして、現在も続く県内の官民各界の人々が集う社交倶楽部が設けられ、５階を大ホールとした。

平面は地階から２階までは事務所機能を考慮して道路側に面した部屋を広くした東寄りの中廊下とし、３・４階はホテル機能から南北両端部を除く中央間だけ梁間を狭くし中廊下とし、５階の大ホールは立山連邦の眺望を考慮して東面に片持構造の張り出す形で廊下としいる。尚、１階の中廊下から西面道路側は当初は天井高の高い吹き抜けになり東背面側が中二階になる。

外観は設計者の趣旨である「華美を避け清洒にして力強き事」のとおり、長方形型の立面は簡素になりがちな壁面となるため、中央部をやや高く上げて変化を持たせ、当初は中央出入口と両端側斜面の出入口上部の大窓には、現在は取り外されて無いが大きく力強い鉄格子が付けられて「固まりと空間」の主点し、その間の壁面は溝型に窓を配列

して美的リズムをつくり出している。但し、垂直線の旋律的な配列は動的だが外観美を構成する分子を分散させる所がある為、４階の大窓上と５階中央部全面に強くバルコニーを壁体より突出し、１階各出入口の上にも強く庇を出して、上下が相呼応して簡素な外観の持つ単純性に変化をつくりだし、「固まりと空間」を完成させている。

外壁は明るく空色との融和を考慮して淡白色のタイルを用い、腰廻りはアスファルト舗装の地盤と壁体を結び付ける意味で御影石の布石積とし、多少の色調的コントラストを求めている。尚、中央の右手屋上には電気ビルである事を表現するためのシンボルとしてマスト型の装飾塔が設けられ、かつては照明器具が設置され光を放っていた。

外観に於ける後世の改変としては、正面１階中央の出入口を塞いでショーウィンドーとし、左右のショーウィンドーは腰高を揃えるためタイル張りの壁を足し増しており、また、中央出入口より南側は北寄りの窓３列を撤去して出入口とし、南寄りの出入口は窓に変更され、北側は北隅との間の窓３列を撤去して出入口に変更しており、南北両端側斜面の出入口庇も軒先に意匠的なテラコッタが付くが、軒の出を出す改修で隠されている。上部では中央部５階の左右に、側廻りから半間程セットバックして５階が増築されている。新館は本館と同様に１階西寄りの額縁状に張り出した出入口枠上部大窓の鉄格子が撤去され、上部では５階上の中央部に６階が昭和38年に増築されている。

玄関ポーチ廻りは階段や床及び柱や壁が全て重厚な御影石張りで、２本の太い丸柱で庇屋根を受け、出入口両脇の石壁には水平に真鍮製の金目地を用いて豪華さを演出している。玄関ポーチを入ると天井の高い玄関になり、床は四半敷状の人造石研出しで、薄い白と黒の市松模様で豪華に真鍮製の金目地とし、ホール中央は菱形模様になる。壁はトラバーチン（多孔質の石灰岩）張りで、開口部や開放となる間仕切では壁の角に面を取り、開放口上部の両端隅には意匠的な同石質の持送りを付けている。天井は全て白漆喰で反転曲線の蛇腹上にデンティル（歯刻み）を出して２段の蛇腹が付き、天井面の周囲には二段の僅かな段差を付けている。尚、玄関ホールでは更に豪華に最初の蛇腹下に縦長の筋を連続させている。玄関ホールに設けられたエレベーターの横には各階から１階の郵便函へ投函する「郵便差入口」が設置されており、文字も右から左書きになる。また、左から右書きに位置を変更されているが真鍮製の当初の「一階」の文字も残る。

地下室の旧食堂口は床や壁の腰廻りをタイル張りとし、各階廊下の床は周囲を黒のボーダーにして中を鼠色とした人造石研出し、またはフロアリュームで、壁は黒めの幅木に白壁で、天井はシンプルな１段の反転曲線の蛇腹に白塗り天井としている。また、各階への階段室の床や階段及び腰壁や手摺は全て人造石研出しで、床は周囲を黒のボーダーにして中を鼠色とし、階段は黒で滑り止めのスクラッチタイルを張る。腰壁は幅木と見切縁を黒にして腰を鼠色とし、手摺も同様で手摺の上端は蒲鉾型にして踊り場周囲の隅や立上角は丸くしている。腰壁上の壁と天井は白漆喰とし、踊り場天井の入隅部分は丸くしている。各階の室内はそのほとんどが改修され新しくなっているが、一部の部屋に当時の大理石の暖炉や照明器具、及び時計やＧＨＱ接収時の看板が残っている。

この富山電気ビルは民間企業が建てた富山県初の本格的な鉄筋コンクリート造の貸事務所兼大ホールを備えた近代ホテルのビル建築で、その設計理念と意匠や技術、及び設備等は時代の最先端を行くものである。戦前戦後の我国海軍や進駐軍の接収や富山大空襲による戦災など、幾多の困難に逢いながらも創立時からの構想に基づいて地域の文化交流の拠点として発展し、現在も富山県産業の近代化を象徴する歴史的建造物として県民に深く慕われ活用されている。

富山電気ビル新館所見

昭和31年に増築された新館は、本館を設計した富永譲吉が携わっている事から、本館設計時に後の北側道路に面した増築のあり方に沿っており、北西隅を中心に左右対称のＬ字形になる姿とし、外観も本館とほぼ同様の形状や意匠及び素材や色として全体を一体化した設計となっている。施工は日本海建興で総工費は約４億２千万円になる。

建物は敷地の北面道路に接して本館北端の東面に接続するかたちで建てられており、地上６階地下１階、延面積 2,287坪で、地階から６階までを全て貸事務所とし、建設の目的から、そのほとんどを北陸電力の本社機構と富山支店が使用していた。後世の改変として昭和38年に５階上の中央部北側に６階が増築され、同55年に６階を改築、平成元年には外壁タイルと内部設備の改修が行われている。

新館の平面は、基本的に本館使用の機能向上をも図る事から、本館に接する西端を各階への連絡通路となるホールにして、階段とエレベーターを設け、エレベーター横には本館と同様に各階から１階の郵便函へ投函するシューターが設置されており、素材はステンレスになり戦後であるため文字は左から右書きになる。

各階の基本的な平面は、地階から５階までは中央に柱を２本列で配した構造と事務所機能を考慮して中廊下とし、中廊下突き当たる東側端にも階段が設けられている。尚、本館との床高調整や外観意匠を揃える必要性から、階高調整に苦労のあとがみられ、各階の床高や天井高さの違いを数段の階段で処理している。

外観は前記のように北面表側は特に本館との調和を考慮し、腰廻りは地面際に地下室の鉄格子窓が付く違いはあるものの４段布石積の桜御影石張りになり、柱型も３階まで太い主要柱間に２本の細い柱が入り、柱頂部には本館に似た意匠のテラコッタが付き、４階は平坦な壁面としている。また、窓も４階までは本館と窓高を揃え、５階は４階と同様の窓とし、壁面も本館と同様の色のスクラッチタイル張りで、頂部も縦溝状のテラコッタ張りとし、樋も本館と同様の意匠で柱２本置きに入る。

外観に於いて顔となる玄関ポーチは、本館取付き際となる西端に設けられているが、当初設計図では玄関上に本館と同様の高さで庇を付けただけの、存在感のない形となっている事から実施において変更したものと考えられる。やはり本館玄関との調和を図りつつも本社ビルとしての玄関を意識した意匠で、二階窓上の高さで額縁状に張り出した大きな出入口枠は、内部壁面も含めて全て桜御影石張りになり、本館と同様にかつて出入口上部に鉄製格子が付いていた痕跡が残っている。

背面側の外観は、本館取付き際の便所・ホール部は１階だけ当時としては先駆けのガラスブロックにして他の階は大窓とし、階段部は階段状になる三連の短冊窓とするなど意匠的になる。北側の４階までは一般事務室のため自然光を取り入れる大きな窓を開くが、通信機械所になる５階や、小部屋で仕切られ役員室となる東寄りの３・４階は小窓・二連の窓にして単調になりがちな窓に変化をつくりだしている。

玄関ポーチを入ったホールは、床は周囲ボーダーが灰色で、中は白系の四半敷状の真鍮製目地に人造石研出しになり、壁はテラゾー板張りで、天井は現在プラスターボードになり、各階のホールもほぼ同様の仕様としている。ホールからの階段は、階段と幅木が灰色の人造石研出しで、階段の角には真鍮製の滑止めを付け、手摺は鉄製板を用いたシンプルな意匠の黒ペンキ塗りで、手摺子だけを金色の真鍮製としている。壁と天井は白のプラスターで、踊り場の天井には廻縁に反転曲線の蛇腹を付ける。尚、会議室にはタイルや茶色の大理石を用いた意匠的な暖炉が備え付けられている。

（展望室）

展望室への階段は螺旋階段で手摺も三次元の曲線形になる。建物の室内は一室で壁は無く、市街地や立山連峰を眺める事ができるように全てガラス窓になり、窓は鉄製の片開きガラス窓で上部を回転窓とし、床下の各面２か所に掃きだし高に換気口が設けられている。東南面側には椅子と肘掛を兼ねた窓台板が作り付けられ、柱も太いコンクリート柱だが、東南面は細い鋼管円柱とし東南に望む立山連峰を良く見えるように気配りがなされている。室内は鼠色の幅木に鶯色の壁や窓枠及び建具に白塗り天井としている。

外　観

本館西面

同上　中央ベランダは昭和天皇の御立所

室　内

本館玄関ホール

本館４階エレベーターホール　中央にはポストシュート

展望室

本館屋上　昭和天皇来県の折に作られた立山連峰を見るための物見塔

同上　室内　隅柱はRC造になるが立山連峰側だけは鋼管柱になる

大ホール

本館室内大ホール　現状

同上　創建当初（この形に復原予定）